

圓教寺摩尼殿（如意輪堂）

摩尼殿は圓教寺の中心部に位置している。ここで、圓教寺の開祖性空上人（910–1007）が偈文を唱えているとき、一本の桜の木の周りを舞う天女を目撃したと言われている。天女の詩は、6本の腕の如意輪観音（サンスクリット語：チインタ・マニ・チャクラ）という慈悲の菩薩が生きている木の姿で出現する様子を描写していた。偈文によると、如意輪観音は長寿と繁栄の菩薩で、いつの時代にもすべての生き物が極楽に生まれ変わることができることを保証している。この理想に触発されて、性空上人は桜の木に如意輪観音のお姿を彫刻し、それをお守りするために仮のお堂を建てた。その後、970年にお堂と如意輪観音を中心にして如意輪堂が建設された。

このお堂は、1174年に後白河法皇（1127–1192）が圓教寺を訪れ、像を見たいと要求するまで閉ざされたままで、如意輪観音像は公開されていなかったと伝えられている。後白河法皇が如意輪観音像をご覧になったとき、このお堂を現在の名である「摩尼殿」とお名づけになった。摩尼は、仏教の教えの中心にある宝石（サンスクリット語：マニ）を意味している。摩尼殿は4回再建されたが、毎回建物は、桜が立っていた場所に建てられた。

摩尼殿の内側には、祭壇の後ろの壁に厚い漆塗りの扉が3組ある。これらは、四天王像が安置されている部屋である。年一回、1月18日にこの扉が開かれる。この日、圓教寺は新年の平和と五穀豊穡の祭典（修正会）を執り行う。